

# 「和裁職人大賞」を開催するわけ

きもの着やすさは、その素材感と並んで仕立てが重要です。  
工業化されている昨今、実は体に馴染む着やすい仕立てがどんどん失われているのが現状です。  
それに伴い、仕立ての良し悪しに気づいて下さるお店やお客様が、残念ながら非常に少なくなってきています。  
『着やすい仕立て』より『納める時にきれい』に見える、ということに重きを置かれるようになってきました。

東京モノショーが考える“着やすくして生地によさしい仕立”とは \_\_\_\_\_

## 例えば 針目が非常に細かくてきれい！

➡ 一見よさそうに思えるけれど…  
あまりに縫い目が細かいと生地に負荷がかかります。  
程よい遊びがあってこそ。ひっかけた時など生地ではなく糸が切れる仕立てがきものにやさしい仕立てです。



審査員長 東京マイスター 草川 幸郎



東京モノショー2018 和裁職人大賞授賞式より

## 例えば わっ、着物ハンガーに吊るしてみたら、裏地が袋になってる！

➡ 一見、仕立てが悪いみたいに思えるけれど…  
いえいえ、裏に緩みは必要なのです。  
理由は大きく二つ。  
羽織った時に重い表地の方が落ちるので、はじめから裏地にその分の余裕を入れておけば、表袋にならなくて済みます。また、大島のように表地の収縮が起りにくい生地の場合、経年で必ず裏の方が余計に縮みます。この時のことを考えて、裏に遊びを入れておけば、何年経っても表袋にはならず済みます。そこまで計算した仕立てであることも大切です。

## つまり

東京モノショーが考える良い和裁職人とは \_\_\_\_\_

### 着る人と生地に対して、限りなくやさしい人

そういう職人を発掘し、対価を含めて正当な評価をすることが東京モノショーの望みです。  
和裁は高いと思われがちですが、本当にそうでしょうか。  
現代のきもの業界で和裁職人が、いえ、様々な職人が本当に正当な評価を受けているのでしょうか。  
たくさんの心遣いには時間と手間がかかるものです。毎日祈るような思いで仕事を積み重ねる根気と、砂をかむような地道な日々の中で自分と戦い続けているのです。  
そういう想いで仕事に向かっているキラキラを発掘することは公のイベントを仕組む私たちにとっての意義でもあります。  
お客様の満足度に対し、また業界に対して、どれほどの効果があるかはわかりません。  
でも、何かはやらすにはいられないのです。  
少しでも、販売する側とお客様、そして和裁職人が互いにwinwinになれることを祈って……。

### ちなみに 和裁職人大賞の 審査基準です～

- ★ 技術点が 総合 点以上の作品に☆が1つ授与される。  
参考基準：国家技能検定1級合格と同レベルで着やすいと評価された作品。
- ★★ 技術点が 点以上の作品に☆が2つ授与される。  
参考基準：検定試験や全国コンクールの中でも特に優秀な作品と同レベルで着やすいと評価された作品。
- ★★★ 技術審査で☆が授与された作品の中でも特に高得点のものに対して、つり込みや着装審査を行う。  
また、一部解くこともある。その結果、特に優れていると認められた作品。

※参考値としての基準点数です。